

放送大学大学院博士後期課程体験記—濃密かつ贅沢な日々

社会経営科学プログラム

石野 利和

私が博士後期課程への入学を考えたのは、公務員の定年退職を迎える1年ほど前のことです。定年後の再就職も考えていましたので、仕事と両立できることが大前提でした。私は、修士課程も放送大学で経験し、通信制ならではのメリットを感じていましたので、博士後期課程も放送大学を選択することに迷いはありませんでした。

私の研究テーマは、公務員在職中に関わっていた無形文化遺産保護条約に関するもので、国内法との関係について、一度整理しておきたいと考えていました。幸いに博士後期課程に入学を認められ、主担当指導教員として国際法の大家であられる柳原正治先生のご指導を仰ぐことになったのは幸運でした。また副担当指導教員には、文化人類学がご専門の大村敬一先生及び法律学、特に商法がご専門の李鳴先生になっていただきました。大村先生のゼミでは、人類学の観点からの議論に触れる機会を頂きました。

社会経営科学特論では、社会学、経営学、政治学、マネジメント論などをご専門とされる先生方から1対1の個人指導を受けるという大変贅沢な時間を過ごしました。また私の在学中はマイナー研究法を2科目取ることが求められていましたので、生涯学習論を専門とされる岩崎久美子先生の研究法の科目を取り、岩崎先生からは博士論文の取り組み方について厳しくかつ温かいご指導を頂きました。

柳原ゼミは、コロナ禍以前は幕張の大学本部で行われ、修士課程の方と私の2人でご指導頂きました。コロナ禍に入ってから、柳原先生とzoomで1対1の個人指導を2～3か月に一度のペースで受け、博士論文の進捗状況をご確認頂きました。事前に資料を柳原先生にお送りしコメントを頂いた箇所について、改めて説明するという繰り返しの中で、私自身の詰め切れていない箇所や考えがまとまっていない点を明らかにしていくという日々を過ごしました。柳原先生には、根気強くお付き合い頂き、ご指導頂いたおかげで、博士論文が完成したものと感謝しております。

そのような通常の指導とは別に、年に1回、博士後期課程在学生のプログラム報告会があります。各学生から進捗状況を報告し、社会経営科学プログラムの先生方から質疑応答がなされる会です。この報告会は、自分の研究の進捗状況を確認する上で極めて貴重な機会になりました。

また、放送大学の博士後期課程では、「関連専門学会の査読付き学術論文又は

それと同等レベルの学術論文を2編以上発表していること」という要件が課せられています。私は、入学前に投稿した雑誌論文や本の分担執筆の2編が、幸いにも「同等レベルの学術論文」と認定いただきクリアしましたが、この条件をどのようにクリアするかは、入学前から真剣に検討しておくべき課題の一つです。

以上が私の体験記ですが、少しでも皆さまのご参考になれば嬉しく思います。

(本文 1,188 文字、全体 1,283 文字)